










病害虫発生予察情報予報第 7 号 (10 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	並	
	1. トビイロウンカ 県内の一部の圃場で、坪枯れの被害を確認している。今後もウンカ類の発生に好適な気象予報となっていることから、圃場ごとの発生状況をよく観察し、発生が多い場合は早急に薬剤防除を実施する。		
大豆	ハスモンヨトウ	多	 カメムシ類
	カメムシ類	やや多	
	1. ハスモンヨトウ 圃場での幼虫の発生が多く、フェロモントラップでは9月中旬以降に誘殺数が急増している。圃場ごとの発生状況をよく観察し、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている場合は追加防除を実施する（令和6年9月20日付け病害虫発生予察注意報第4号参照）。 2. カメムシ類 カメムシ類による被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、莢の伸長初期～子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10 日間隔で 2～3 回防除を行う。		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	並	 炭疽病 汚斑型病斑
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや多	
1. 炭疽病 天井ビニル被覆時まで本病に対する薬剤防除を継続する。 2. 次年産親株の病害対策 本年は、育苗期に炭疽病の発生が多かった。次年産での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では、優良種苗等への更新を行う。			
キュウリ	べと病	並	 退緑黄化病
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	アザミウマ類	やや多	
	コナジラミ類	やや多	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
	1. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 ウイルス病の病徴が見られる株は早急に抜き取り圃場外に持ち出して処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。ウイルス病未発生圃場においても、媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。		
アスパラガス	茎枯病	並	 褐斑病
	褐斑病	並	
	斑点病	並	
	アザミウマ類	やや少	
	ハダニ類	並	
	1. 褐斑病 3週間間隔の薬剤防除を基本とするが、既に発生が見られる場合や、週間天気予報により曇雨天が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする等の対策を徹底する。なお、薬害の発生を防止するため、薬剤の乾きにくい条件での散布を避ける。 2. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬液が内部まで到達しにくいので、株外側からの散布に加え、ノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど、十分な薬量で丁寧に散布する。		
タマネギ	1. ベと病 苗床での感染を防ぐため、育苗期から予防防除を行う。		
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ シロイチモジヨトウ)	多	 ハスモン ヨトウ
	1. チョウ目害虫 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多い。圃場ごとの発生状況を確認し、若齢幼虫期の防除を徹底する（令和6年9月20日付け病虫害発生予察注意報第4号、令和6年9月25日付け病虫害発生予察対策資料第16号参照）。		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 ツヤアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う（令和6年8月27日付け病虫害発生予察注意報第3号参照）。 ツヤアオカメムシは常緑樹の樹上で越冬する習性があり、カンキツ類の樹上でも越冬する。本虫が越冬のために飛来したカンキツ樹に果実が結実している場合は、果実を収穫するまで被害を受けることになるので、寄生状況に注意する。		
カンキツ	ミカンハダニ	多	  ミカンハダニ ミカンサビダニ
	チャノキイロアザミウマ	並	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
	1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は、果実腐敗の原因となるので、収穫時に取り除き処分する。また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に取り扱う。腐敗防止の薬剤は、収穫7～10日前に、霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず薬剤散布を行う。また、罹病しやすい品種では、感染防止のため園内の発病葉および発病果実を切除し、埋却または園外に持ち出し処分する。 3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。		
ナシ	1. 黒星病、炭疽病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した罹病葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
ブドウ	1. ペと病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
キウイフルーツ	1. かいよう病 収穫期頃から、本病菌の増殖に好適な気温となる。感染を防止するため、発病の有無にかかわらず、全ての園において、収穫終了直後から銅水和剤による定期的な防除を実施する。		
キク	白さび病	やや多	 チョウ目害虫による被害
	アザミウマ類	やや少	
	アブラムシ類	やや多	
	ハダニ類	並	
	ハモグリバエ類	やや多	
	チョウ目害虫	多	

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（3ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～3ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
5ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

10月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する10月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和6年9月19日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年より多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における10月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	10 (19.1℃)	80	高い
降水量	20	30 (90.1 mm)	50	多い

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

定期調査：41 圃場（7 圃場収穫済）
調査日：9月17～19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（普通期水稻「さがびより」）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0.3%（平年 13.6%、前年 0%）
平年比：やや少（-～±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

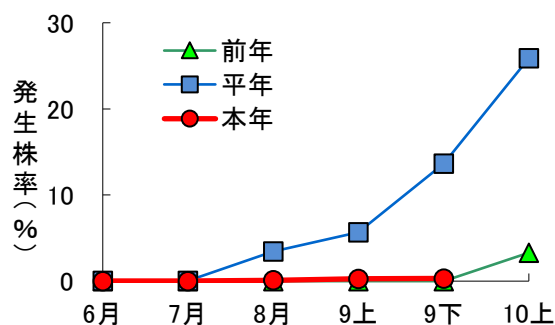


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：9月17～19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（大豆）

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 13.1%（平年 4.6%、前年 4.2%）
平年比：多（+）

白変葉発生株率 2.4%（平年 0.9%、前年 4.0%）
平年比：やや多（±～+）

② トラップ調査（図2参照）

平年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら防除を実施する。
- (2) 防除の際は、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

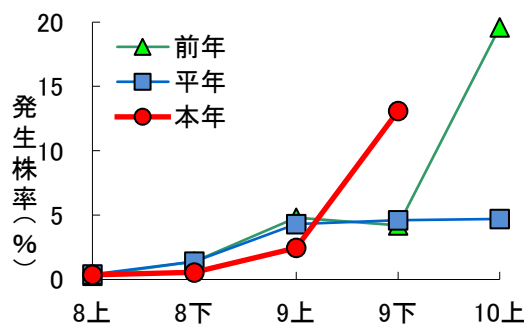


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

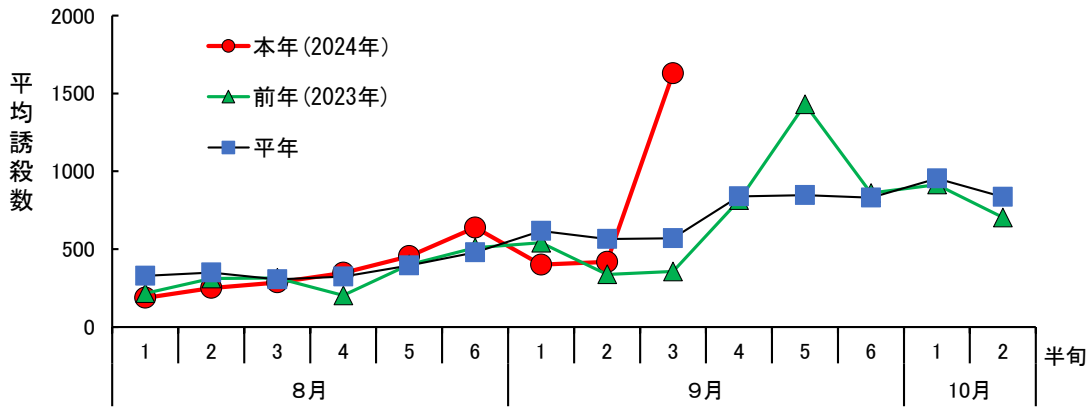


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

2. カメムシ類 (アカカメムシ, 仔モンジカメムシ, ホバカメムシ, ミミアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.1% (平年 0.2%、前年 0.3%)

平年比：やや少 (一~±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

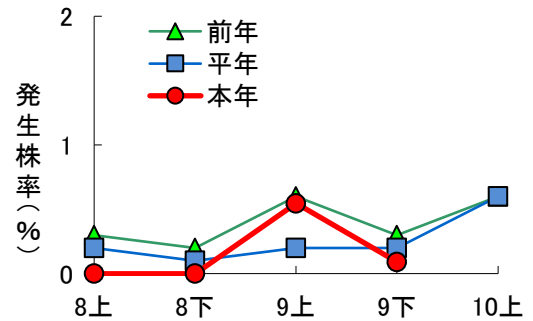


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (本圃)

定期調査9圃場、防除員2圃場

調査日：9月17~19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 1.5%、前年 0%)

平年比：やや少 (一~±)

(2) 10月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件 (+)

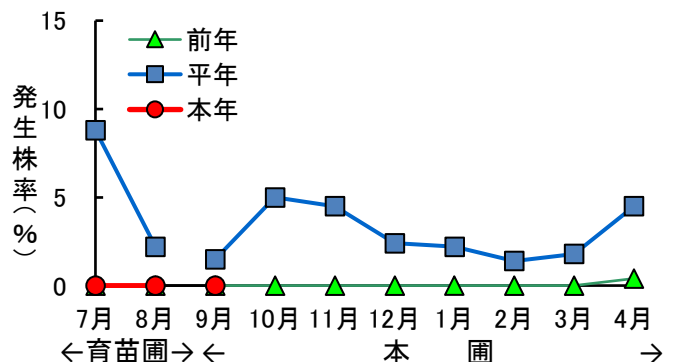


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：3.6% (平年 6.6%、前年 3.3%)

平年比：やや少 (一～±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、降水量が多く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

- (2) 天敵 (カブリダニ類) を利用する圃場では、天敵への影響が少ない薬剤を用いてハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵を放飼する。

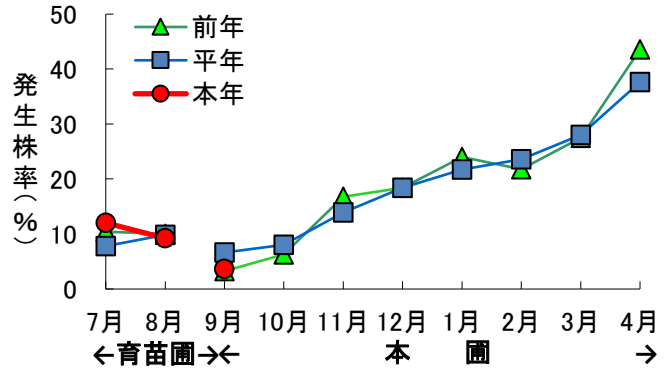


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：2.9% (平年 3.5%、前年 0.5%)

平年比：並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

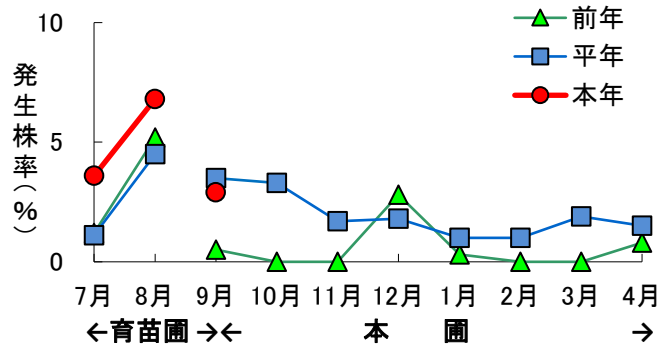


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

定期調査4圃場、防除員2圃場

調査日：9月17～19日

[【概要に戻る】](#)

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並



定期調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 0% (平年4.9%、前年0.6%)

平年比: やや少 (一~±)

(2) 10月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 適正な湿度管理に努める。

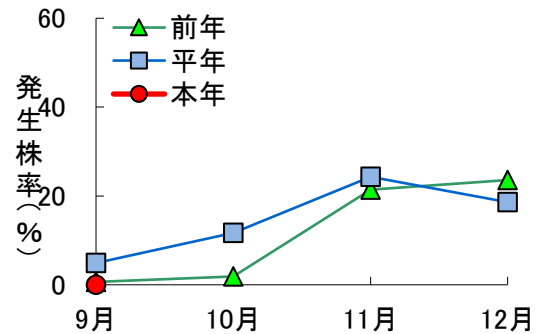


図1 キュウリべと病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 0.8% (平年1.8%、前年2.5%)

平年比: 並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

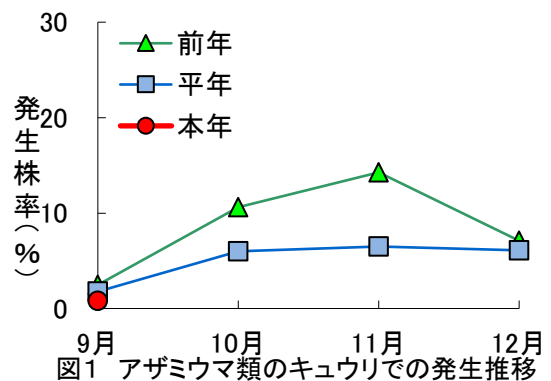


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 4.2% (平年7.2%、前年15.6%)

平年比: 並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

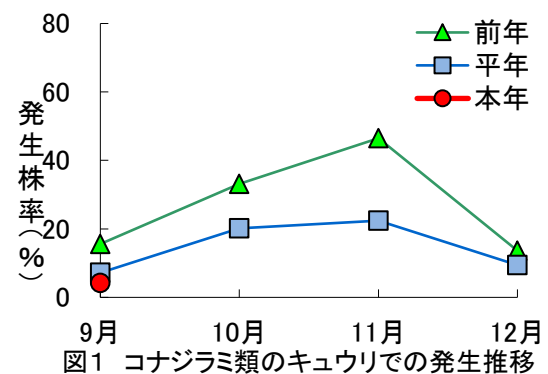


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

アスパラガス

定期調査: 8 圃場

調査日: 9月17日~19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：14.4%（平年 54.4%、前年 60.0%）

平年比：少（-）

(2) 8月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

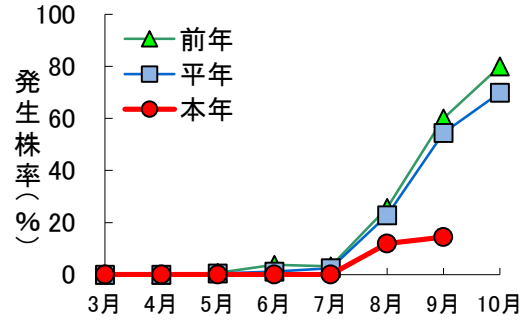


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

野菜共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1,2参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	0.4	やや少（-～±）	1.3	1.3
アスパラガス	0	並（±）	0.1	0

②フェロモントラップによるハスモンヨトウの9月の誘殺数は、平年より多い（図3）。〈+〉

③フェロモントラップによるオオタバコガの9月の誘殺数は、平年より多い（図4）。〈+〉

④フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの9月の誘殺数は、平年より多い（図5）。〈+〉

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除に当たっては、使用方法（収穫前日数等）を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

(2) その他は、特記事項を参照する。

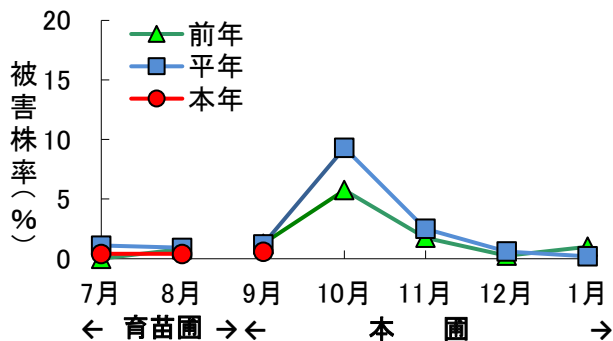


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

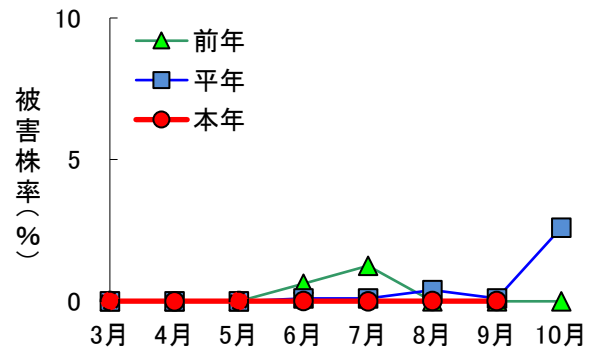


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

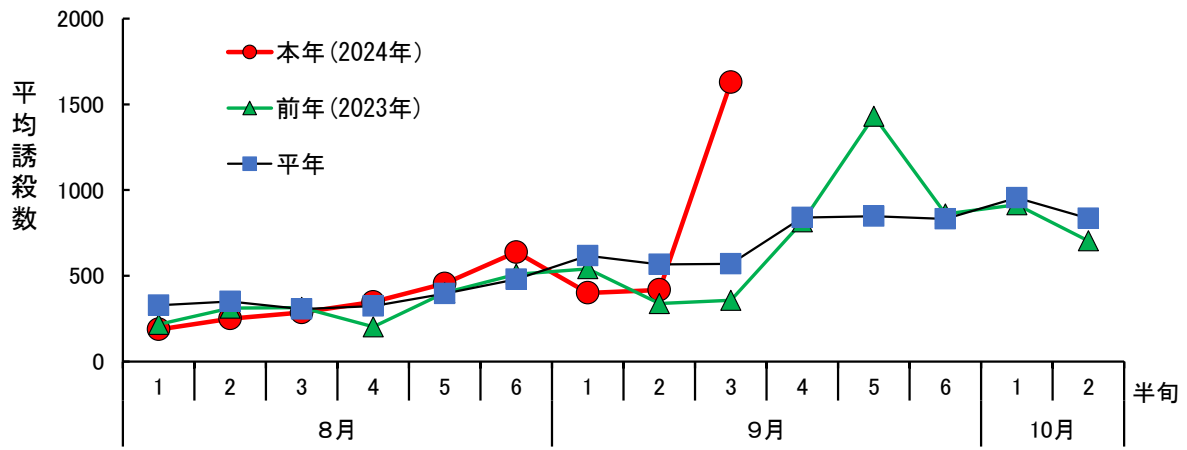


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

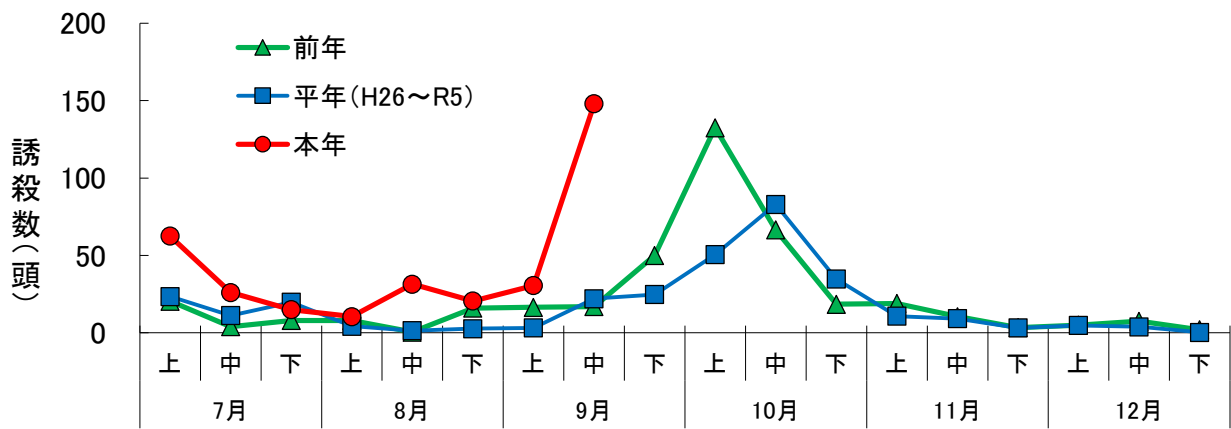


図4 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の半旬別誘殺数
(川副町2地点の平均:病害虫防除員1地点、農業試験研究センター1地点)

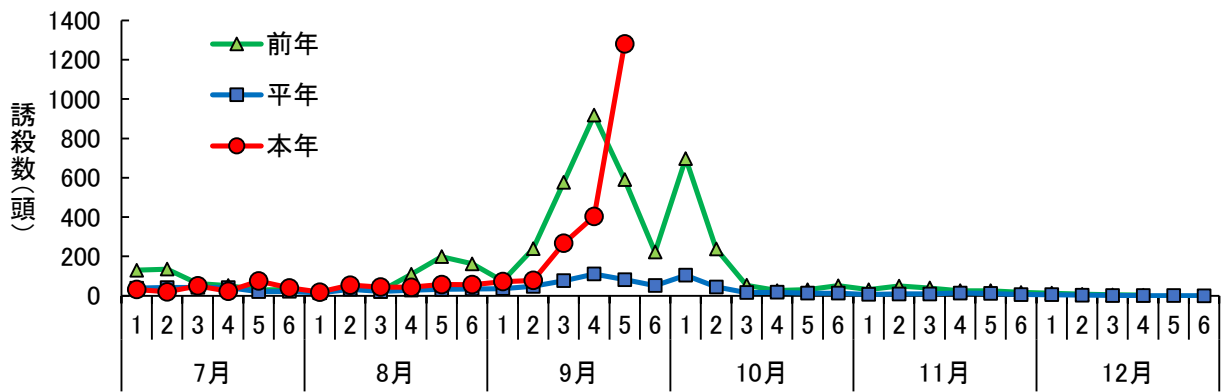


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

1. カメモシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯 (図1参照) 平年比：並(±)

②フェロモントラップ (図2参照) 平年比：並(±)

③一部の地区では樹園地へ飛来しており、被害が発生している。

(2) ヒノキ毬果における寄生数 (図3、表1参照、9月17~19日調査)

成幼虫数平均：1.5頭(平年16.6頭、前年33.3頭) 平年比：少(−)

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数 (表1参照、9月17~19日調査)

9月上旬時点で1果当たり口針鞘数が25本を超えた7地点は調査せず、残り5地点のみの調査とした。

口針鞘数平均(5地点)：26.5本/果

(4) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

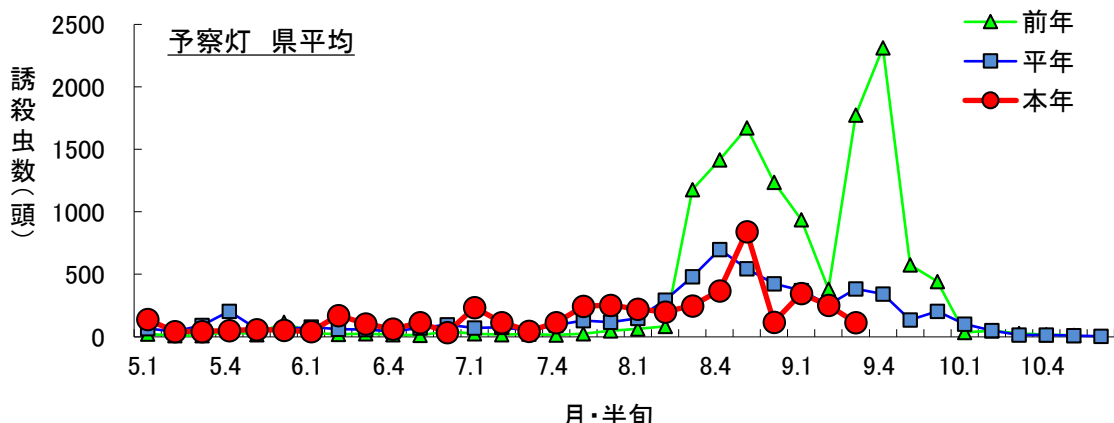


図1 予察灯(佐賀市、小城市(果樹試験場調査))による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

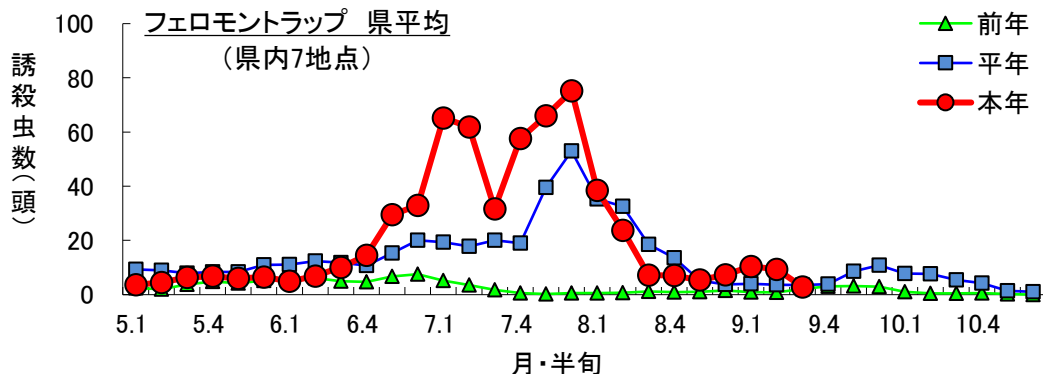


図2 フェロモントラップ(鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査))による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

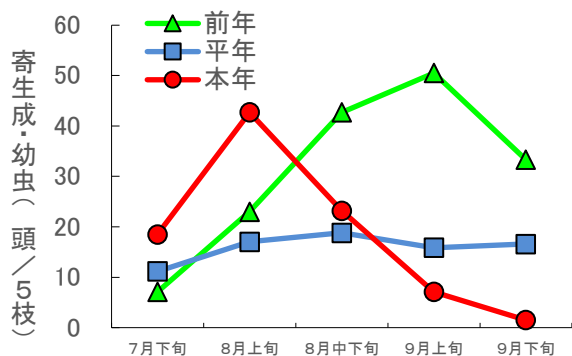


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数(図3に関する地点別の状況)

No.	調査地点	寄生虫数															口針鞘数 ³⁾				
		7月下旬			8月上旬			8月中下旬			9月上旬			9月下旬			7月下旬	8月上旬	8月中下旬	9月上旬	9月下旬 ⁴⁾
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計					
1	上峰町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	神崎市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	小城市	2	0	2	9	6	15	12	1	13	10	1	11	0	0	0	0.2	6.7	14.3	34.9	-
4	唐津市1	20	8	28	63	2	65	1	0	1	4	0	4	1	0	1	0.5	10.9	18.8	22.0	23.4
5	唐津市2	21	2	23	13	2	15	26	2	28	10	2	12	5	0	5	0.2	3.4	11.9	18.0	23.1
6	唐津市3	50	15	65	35	12	47	3	0	3	7	0	7	4	0	4	0.7	7.2	7.8	23.3	35.3
7	伊万里市1	3	14	17	13	27	40	0	0	0	0	2	2	1	0	1	1.6	14.4	16.1	34.1	-
8	伊万里市2	6	9	15	9	19	28	6	24	30	0	5	5	1	0	1	1.7	19.0	11.3	17.4	25.3
9	伊万里市3	5	0	5	4	117	121	1	6	7	0	1	1	0	0	0	0.1	9.1	22.5	35.7	-
10	多久市	2	0	2	23	9	32	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0.3	5.1	5.0	26.9	-
11	鹿島市1	19	3	22	9	14	23	2	1	3	2	0	2	1	0	1	5.4	25.0	32.1	25.7	-
12	鹿島市2	9	9	18	17	13	30	3	2	5	7	0	7	4	0	4	3.9	22.5	19.6	28.1	-
13	太良町1	9	11	20	72	15	87	74	6	80	10	0	10	0	0	0	1.0	14.9	19.2	22.3	25.5
14	太良町2	1	4	5	9	0	9	104	3	107	23	1	24	1	0	1	1.9	10.9	20.5	26.8	-
	平均	12.3	6.3	18.5	23.0	19.7	42.7	19.4	3.8	23.3	6.1	1.0	7.1	1.5	0.0	1.5	1.4	12.4	16.6	26.2	26.5
	平年	-	-	11.1	-	-	17.0	-	-	18.8	-	-	15.9	-	-	16.6	1.9	7.8	14.4	18.9	22.1
	前年(R5年)	-	-	7.1	-	-	23.0	-	-	42.7	-	-	50.5	-	-	33.3	0.2	3.6	11.2	26.1	30.2

1)たつき落としによる調査

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少:一部の木では上部にも毬果が見られるが、多くの木では上部にも毬果がない。
- ・少:毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果がある
- ・やや少:毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中:中央部まで毬果が見られる木が多い
- ・やや多:多くの木では中央部までたくさんの毬果が見られ、一部は下部にも毬果がある
- ・多:下部まで毬果が見られる木が多い
- ・極多:ほとんどの木で下部までたくさんの毬果が見られる

3)口針鞘数が1果あたり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

4)9月上旬に1果あたりの口針鞘数が25本を超えた地点は9月下旬の口針鞘数調査は行わず、平均値は調査した5地点の平均とした。

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいため、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8圃場
調査日：9月18日～19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：15.5%（平年1.3%、前年1.9%）

平年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

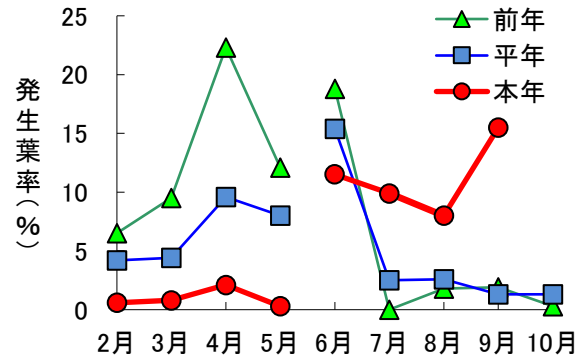
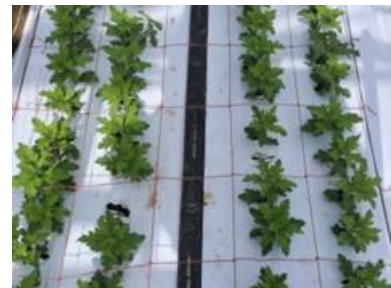


図1 カンキツ ミカンハダニの発生推移

キク

定期調査6圃場（2圃場はビニル被覆中のため調査不可）
調査日：9月17～19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内が多湿にならないように適宜換気を図るとともに、発生前から薬剤を定期的に散布する。散布する際は、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。

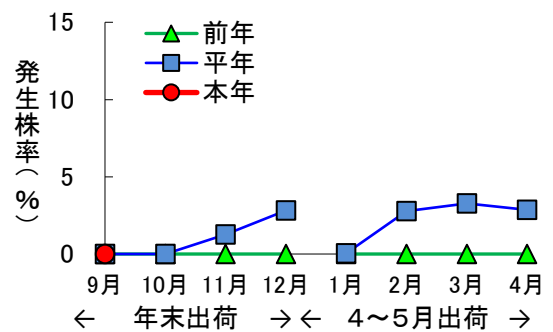


図1 キク白さび病の発生推移

2. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 6.9%、前年 0%)

平年比：少 (<-)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (<+)

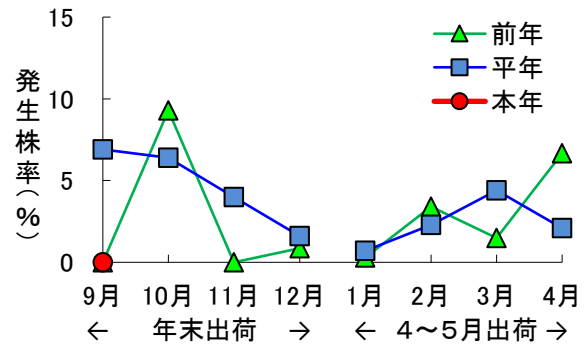


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。

(2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

(3) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSW)・茎えそ病 (CSNV) のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 0.2%、前年 0%)

平年比：並 (<±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (<+)

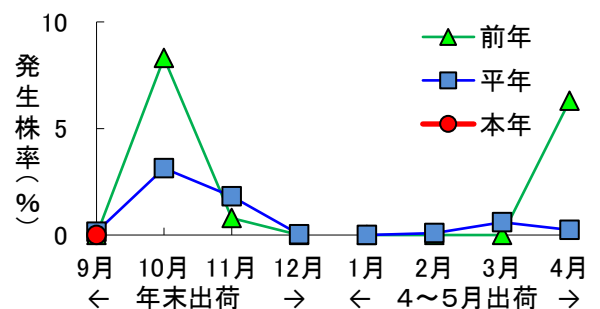


図1 アブラムシ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率：0% (平年 0.7%、前年 0%)

平年比：やや少 (<-~±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (<+)

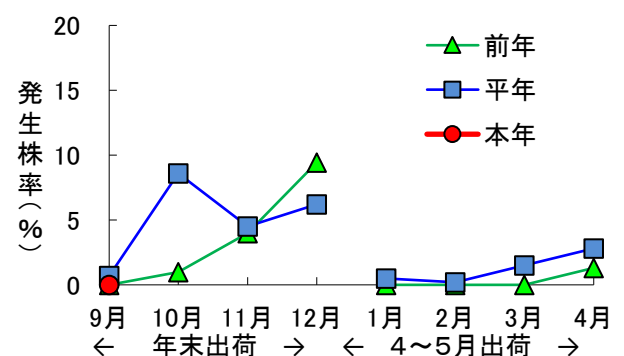


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

被害株率：0% (平年0%、前年0%)

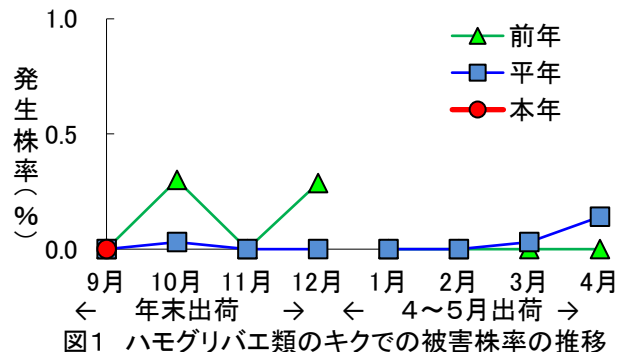
平年比：並(±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下葉にも薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



6. チョウ目害虫

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

被害株率：0% (平年0.7%、前年0.8%)

平年比：平年よりやや少ない(一~±)

② フェロモントラップによる誘殺数

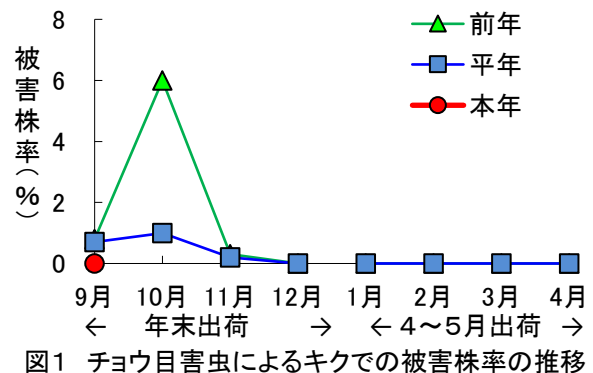
野菜共通の項参照

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生程度は、圃場ごとに大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。
- (2) 薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が劣るため、若齢幼虫期に防除を行う。



連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

